

\* これは実際の試験問題ではありません。  
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 「70分をどう使うかは自由です」などと言われても踊ったりしてはいけません。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に42の問い(1-42)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味70分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて70分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があったらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

注：図版省略

## I

武蔵野の一角を占める或る大学の校歌は、「はるけき武蔵野 ふじのね高く 仰ぐまなざし」と歌い出し、それが英語では"On the plains of Musashino, Fuji tow' ring o'er the lea, Stands our lovely Alma Mater"となっている。(注) lea = 草原 (grassland)、牧草地 (meadow) の意の詩語。Alma Mater = 母校。fostering mother (養母) の意のラテン語から。

そこで先ず「武蔵野」の範囲を確認しておきたい。もちろん、ここで言うのは、道路標識に矢印で「左へ行けば調布、右へ行けば武蔵野」と示してある、その「武蔵野」ではない。あれは道路案内標識の通例として「奥多摩町」を単に「奥多摩」と書くように「武蔵野市」の略で、かつての吉祥寺村・境村などが明治二十二年に三鷹村を囲むようにして合併してできた「武蔵野町」が、昭和二十二年に市制をしいて「武蔵野市」となった(因みに、昭和十五年に町になった三鷹が市になったのは、武蔵野市より三年後である)もので、今の問題とは別の概念である。

武蔵野の範囲を地形的に検討した文献は、昭和三年に出版されて先年復刻版も出た高橋源一郎編『武蔵野歴史地理』など、いくつかがあるが、ここで見るべきは、明治三十年代に刊行されて昭和四十年代に増補版が出た吉田東伍の『大日本地名辞書』である。この辞書には「武蔵野」について、次のように述べられている。文体や仮名遣・送仮名、中には地名の表記など、現代と違う点もある(特に、並列点は打たないこともあれば読点で代用することもある)が、先ずは読んでみよう。

武蔵野<sup>ムサシノ</sup>はれ当国の平野の謂ひなれど、本来は国名却つて野名に出でしやも知るべからず。地理上より其形勢を推せば、南方相模野<sup>サガム</sup>に隣り、北方利根川に至り、西堺は秩父、甲斐に連なれる高峰峻嶺を仰ぎ、東は江河(利根の諸派)及び海湾を以て相限ると謂ふべきか。されど是れ利根水系、坂東平野の一部を指したるにて、本来の大形勢より云へば、八州平野の最広を挙げて、特に武蔵野といへるなり。故に古今遊覧登望の人は、往々武蔵野の広大なるを感興するに、坂東平野全域と同一にして相分つなきことあり。而も狭くとれば、府中河越の間、即江戸の西北郊に連なれる地、最平曠莽蒼なれば、特に指して武蔵野と呼ばれ、近世に至るまで田宅多からず。今や墾破力を余さずと云ふと雖、多摩、入間の郡中に、空閑林藪、彷彿として上古草茫の景状を呈する地あり。

(注) 平曠 = 平らで広いこと。莽蒼 = 青々した色。草の茂った郊野。

ここには武蔵野の範囲としていくつかの定義が述べられているが、暗に最後のがよいと言っているようである。

また『武蔵野』という論集（昭和一六）の中の「武蔵野台地の地学」という論文で地理学者の西村健二は、

西は青梅が扇の要になり、東に向つて扇を半分開いた様な台地で入間川、荒川、多摩川に包まれた略々矩形に近い様な地域を指すのである。

と言っている。「台地」というのは、地形の観察が進んだ段階で与えられた名であるが、ここに述べられた範囲（図 1 参照）が、普通に承認される「武蔵野」であろう。大岡昇平の「武蔵野夫人」（昭和二五）の舞台（図 2 参照）も小金井・国分寺や多磨墓地（今は多磨霊園と言う）・村山貯水地（今の多磨湖）のあたりだし、古くは「太平記」に「武蔵野合戦」と言うのも、所沢の郊外、小手指原の合戦のことで、明治の山田美妙の小説「武蔵野」（明治二）もそれに取材している。因みに、美妙は翌々年「平家物語」の壇の浦合戦の後日談として「胡蝶」を発表したが、その口絵の裸体画が物議をかもした。なお、このごろ『武蔵野歴史散策』その他「武蔵野の何々」と題する本で、奥多摩・奥武蔵などの山里や高尾山、時には湘南地方などまで扱ったものを見るが、それらの地域は「武蔵野」ではなく、「武蔵野の周辺」と言うべきである。

## II

ところで、現在「武蔵野」と言うとき、一般にはどのような風景をイメージするであろうか。古典の世界をしばらく忘れて現代人の感覚で言うなら、雑木林や農家の屋敷林の点在する、田園（耕地、特に畠）風景であろう。大岡信氏らの編集した『大歳時記』（集英社、一九八九）の第三巻「歌枕俳枕」に

武蔵野というと雑木林の点在する風景がひろく知られている...

とある通りで、明治の洋画家浅井忠の名作「春畝」（明治二一、図 3）に描かれたような景色である。先年の芳賀徹の研究によると、この絵は似たような構図の農作業の写真（図 4）を基にして描いたものらしいのであるが、このような風景は戦前・戦後、東京の西部、今の板橋・練馬・杉並・世田谷の各区とその西に続く地域でも普通に目にしたものであった。学研の『カラーグラフィック 明治の古典 7 独歩 四迷 武蔵野 平凡』（昭和五七初版、一九八三第二次版）の扉に右に言及した浅井忠の絵が使われているのを見ても、筆者の記憶と感じ方の正しさは証明されるであろう。

しかしながら、こうした現代人の武蔵野のイメージ、特に林の点在する風景は、明治三十一年に雑誌「国民の友」に発表され、同三十四年に単行本に収められた国木田独歩の「武蔵野」によって作られた点が少ない。そのことは後にも言うとして、かつての武蔵野の実態はどうであったかと言うと、さきほど引用した『大歳時記』には、さきの部分に続けて、

…知られているが、古代から長いあいだ、そのほとんどは広大な薄や萱の原であったといわれる。

とあり、どうもそのようである。近代で武蔵野をほとんど最初に学問的に論じた鳥居龍蔵（明治から昭和まで活躍した考古学・人類学者）の『武蔵野及其周囲』（大正一三）によれば、有史以前の武蔵野は先ず「闊用樹（注、今は広葉樹と言う）の森林」であり、その次に「森林を半ば伐り半ば焼かれつゝあつた半森林・半農牧・半草原時代」があり、そして全く「草原時代」になったとある。信州や北海道あるいはブラジルに入植した人々の森林の開拓を見たり聞いたりした筆者には、この説は十分肯けるし、考古学の調査でも、縄文・弥生時代の武蔵野は広葉樹の森林が多かったことが、発掘される木の実その他からも推測されるという。

### III

ところで、武蔵野を取り上げた一番古い文献と言えは「万葉集」巻十四の「東歌」に収められた「武蔵の国の歌」九首の中の五首で、次の通りである。「むさしの」以外の部分は訓読した形で示すが、「武蔵」は当時ムザシと濁ったと見られている。

武蔵野に <sup>うらへ</sup>占部かた焼き <sup>の</sup>まさでも <sup>うら</sup>告らぬ君が名 <sup>で</sup>占に出にけり（三三七四）  
 （注）占部かた焼き = 後文参照。まさでに = 確かに。本当に。

武蔵野の <sup>きざし</sup>をぐきが雉 <sup>い</sup>立ち別れ <sup>よひ</sup>去にし夕より <sup>あ</sup>背ろに逢はなふよ（三三七五）  
 （注）をぐき = 山の小さい穴か（異説もある）。背ろ = 当時の東国方言で、女性から親しい男性をいう語。せな。逢はなふよ = ずっと逢わないことだよ。

恋しけば <sup>あ</sup>袖も振らむを <sup>あ</sup>牟射志野の <sup>あ</sup>うけらが花の <sup>あ</sup>色に出なゆめ（三三七六）  
 （注）うけら = 後文参照。

<sup>あるほん</sup>或本の歌に曰く、「いかにして <sup>あ</sup>恋ひばか妹に <sup>あ</sup>武蔵野の <sup>あ</sup>うけらが花の <sup>あ</sup>色にで  
 出ずあらむ」

武蔵野の <sup>あ</sup>草はもろ向き <sup>あ</sup>かもかくも <sup>あ</sup>君がまにまに <sup>あ</sup>我は寄りにしを（三三七七）  
 （注）もろ向き = すべてが同じ方向に向いていること。一説に、あちらにもこちらにも向いていること。

<sup>あ</sup>我が背子を <sup>あ</sup>あどかも言はむ <sup>あ</sup>牟射志野の <sup>あ</sup>うけらが花の <sup>あ</sup>時なきものを（三三七九）  
 （注）あど = 当時の東国方言で「どのように」「いかに」などの意。ここは「何と」の

意。時なきものを = いつと言う時なく恋しいものを。

ここに歌われている武蔵野の情景ないしイメージは、大きく分けて二つある。第一首の「占部かた焼き」をするということと、他の歌に詠まれた草や草原とである。

第一首の「占部かた焼き」については、占いを業とする者が鹿や猪の骨などを焼いて、占うことを言ったものとされているが、それよりも今は、その歌でも「武蔵野」と言っていることに注意したい。

第二首以下の場合、終わりから二首目に「武蔵野の草」とあって、武蔵野には草が当然の付き物になっている。他の歌でも、「うけら」は今オケラと言って山野に自生するキク科の多年草であり、「をぐき」は異説もあって問題だが「雉」すなわちキジは草原や灌木の藪に生息するもので、要するに「万葉集」の東歌の時代 恐らく七、八世紀であろう には、武蔵野は「草生い茂る野」というイメージがほぼ成立していたと言えよう。

ここで思い合わされるのが、「伊勢物語」第一二段に見える「武蔵野」の歌である。よく知られているが、

武蔵野は 今日はやきそ 若草の つまもこもれり われもこもれり  
 という歌で、この歌が「古今集」に、最初の句を「春日野は」として見える。そしてこの両者、すなわち「伊勢物語」の「武蔵野は」の形と「古今集」の「春日野は」の形の前後については両説があるが、今注意すべきは、これが春先の野焼きの歌で、場所は必ずしも武蔵野に限る必要はなく、また奈良時代から平安初期に武蔵野でも焼畑や野焼きが行われていたということである。

#### IV

さて、「古今集」以後は「武蔵野」はどのように詠まれているか。平安時代から「新古今集」の頃までについては、すでに江戸時代の『武蔵野話』とか昭和十年代の野村八良の『武蔵野とその文学』などにも記されているが、「古今集」以後の平安時代の勅撰和歌集七つに合計八首見え、中でも「古今集」と「後撰集」の各二首が重要である。

(題しらず) よみ人しらず

秋風の吹きと吹きぬる武蔵野は なべて草葉のいろ変りけり (古今・恋五、八二一)

(題しらず) よみ人しらず

紫の一本<sup>ひともと</sup>ゆ糸に 武蔵野の 草はみながら あはれとぞ見る (同・雑上、八六七)

延喜の御時、秋歌召しければ奉りける 貫之

をみなへし匂へる秋の武蔵野は常よりも猶むつまじきかな (後撰・秋中、三三七)

(題しらず) よみ人しらず

武蔵野は袖ひつばかり分けしかど 若紫はたづねわびにき(同・雑二、一一七七)

(注) ひつ = 濡らす。濡れる。

すなわち「古今集」の二首を見ると、平安初期にも武蔵野は万葉時代と同様なものとして詠まれている。特にムラサキすなわち紫草を詠み込んだ二首目は非常に有名になり、「源氏物語」の「紫のゆかり」のモチーフに先立って、「後撰集」の二首目に早くもその影響が出ている。

では、「新古今集」以下の中世和歌ではどうか。「新古今集」に入った武蔵野の歌は、次の二首である。

水無瀬にて、十首歌奉りし時 左衛門督通光

武蔵野や行けでも秋のはてぞなき いかなる風か末に吹くらむ(新古今・秋上、三七八)

五十首奉りし時、野径月 摂政太政大臣

行く末は空も一つの武蔵野に 草の原より出づる月影(同・同、四二二)

共に名歌で、これ以後よく引用されるが、武蔵野のイメージは、当時の伝統を出るものではない。

その後の中世和歌にも、武蔵野を詠んだ歌はかなりあるが、イメージの基本は変わらない。特に

建保三年内裏の歌合に 大納言通方

武蔵野は月の入るべき峰もなし 尾花が末にかかる白雲(続古今・秋上、四二五)

(注) 建保三年 = 一一一五。続古今集 = 鎌倉中期の勅撰和歌集。

は有名で、この歌は第三句以下が少し変えられて

武蔵野は月の入るべき山もなし 草より出でて草にこそ入れ

の形で江戸時代以後広く愛誦されてきた。林道春(羅山)が江戸から東海道を經て関西に赴いた折の紀行「丙辰紀行」(元和二 = 一六一六)の冒頭にも、

名におふ武蔵野は、月の入るべき山もなしといへば、まことにそくばくの蒼莽を過ぎ

て又蒼莽なり。

(注) そくばく = 「そこばく」に同じ。ある程度の数量。若干。ここはそれを多いというニュアンスで用いている。蒼莽 = 前出の「莽蒼」に同じ。青々とした草原。

とある。近代では、昭和七年に東京市が周辺の町村を併せてほぼ今日の二十三区の範囲(いわゆる大東京)になったときに作られた「東京市歌」(高田耕甫作詞、山田耕筰曲)の一番に

紫匂ひし武蔵の野辺に 日本文化の花咲き乱れ  
月影入るべき山の端もなき 昔の広野の面影いづこ

とあり、もっとよく知られた歌では、昭和四年の映画主題歌「東京行進曲」(西条八十作詞、中山晋平作曲)の最後のところに、

変わる新宿あの武蔵野の 月もデパートの屋根に出る

とある。

## V

次に、和歌以外の散文ではどうかと言うと、先ず平安、鎌倉時代にこの地を実際に旅した紀行文はあまり残っておらず、わずかに平安後期の「更級日記」と鎌倉中期の「とはずがたり」とがある。そしてそこでの描写は、

今は武蔵国になりぬ。(中略) 紫生ふと聞く野も、芦荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓持たる末見えぬまで、高く生ひ茂りて、...(更級日記)

(武蔵国川口で)山といふものはこの国中には見えず。はるばるとある武蔵野の、萱が下祈れ、霜枯れ果ててあり。(中略、この間は川口に滞在) 八月の初めつ方にもなりぬれば、武蔵野の秋の気色ゆかしさに(中略、信州から)武蔵国へ帰りて、(中略)野の中をはるばると分け行くに、萩・女郎花・荻・薄よりほかは、またまじる物もなく、これが高さは馬に乗りたる男の見えぬ程なれば、推し量るべし。三日にや分け行けども、尽きもせず。(とはずがたり)

のごとくで、平安・鎌倉時代を通じて、武蔵野の描写は、「源氏」のような虚構の物語はもちろん、フィクション性の濃い説話文学でも、おしなべてこの段階を出ない。

但し、鎌倉・南北朝・室町時代の関東武士や関東に来たことのある公家の中には、武蔵野の果に富士その他の山が見えるとか見えないとか、いくらか実景を歌に詠んだり紀行文にしたりした人もいるし、さすがに江戸時代に江戸に住んで朝夕富士や筑波を目にした歌人になると、そのことを無視しにくくなるが、それでも、前述のような平安時代以来のイメージは、完全には捨てられなかった。国木田独歩が

「武蔵野の<sup>おもかげ</sup> 俤<sup>はずか</sup> は今<sup>いるまごほり</sup> 纒<sup>ほり</sup> に入間郡に残れり」と自分は文政年間に出来た地図で見た事がある。

(漢字や送仮名などの表記は、初版のそれを一部改めた。本作については以下同じ)

(注) 入間郡 = 現在の川越市・坂戸市・所沢市・飯能市などが属する地域。

と書き起こした「武蔵野」の中で、

昔の武蔵野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ伝へてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の特色といつても宜い。

と言ったのは有名だが、この「昔の」伝々は、以上のような歴史的事実を指している。

## VI

以後、独歩が「武蔵野」で述べたように、林、特に櫛(なら)・櫟(くぬぎ)などの雑木林が、武蔵野の景物になった。今日、武蔵野の典型的な風景として画集や写真集などに収められているものには、農家とその屋敷林や田園風景などもある。向井潤吉は日本の民家を題林に選んで全国を写生して歩いた画家だが、その「武蔵野新雪」(一九七一年)・「武蔵野早春」(一九六六年)と題する作品に描かれたところも、昔の文学に言うような草原ではない。有名な写真家島田謹介の『武蔵野』と題する写真集(昭和三十一年、撮影はその前年の由)などでは、東京の西北郊、新座(にいざ)市の平林寺の境内その他の雑木林が重要な題材となっている。すなわち、独歩の「武蔵野」以後は、武蔵野の実景としての雑木林に目が行き、武蔵野と言えば雑木林、というイメージが確立する。

ところで、独歩が武蔵野の林の存在とその美しさに気づいたのも、実景からではなく二葉亭の訳したツルゲーネフの「獵人日記」の一章「あひびき」(明治二十一年『国民の友』に掲載、同三十九年単行本に収める)の一節からであることは、よく知られている。念のためにその部分を示せば、さきに引いた「林は実に今の武蔵野の特色といつても宜い」のあと、特に



...自分も西国に人となつて少年の時学生として初めて東京に上つてから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至つたのは近来の事で、それも左の文章が大いに自分を教えたのである。

『秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有つた。(中略)自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだ<sup>そよ</sup>が、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。(この後かなり長い部分、今略す)樺の木<sup>の</sup>葉は著しく光沢が褪めても流石に尚ほ青かつた、が只そちこちに立つ稚木のみは総て赤く黄色くも色づいて、をりゝ日の光りが今雨に濡れたばかりの細枝の繁みを漏れて滑りながら脱けて来るのをあびては、キラゝときらめいた。』

すなわちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して『あひびき』と題した短篇の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い。...

という箇所である。このように「武蔵野」の描写一つを取っても、日本の近代文学が伝統に縛られた見方 それが一概に悪いわけではなく、そこにはそれなりの美学があるのだが、今はそのことにはふれない から脱出して写生に向かうのには、西洋文学の影響・刺激が必要だったと言える。

同じようなことが、美術工芸の世界でも言えるように思われる。武蔵野を描いた絵で鎌倉時代以前のもは知らず、恐らく無いのであろうが、室町時代には「伊勢物語」の絵巻類で武蔵野を描いたものがいくつかある。いずれも前出の歌の段を絵にしたもので、丈の高い草の中に一組の男女が身を潜めている構図であり、宗達<sup>の</sup>室町時代の絵巻を模写したという「西行物語絵巻」の一段も、同様な画風である。

その宗達らの近世、江戸時代の琳派になると、いくつかの屏風がある。例えば宗達の「武蔵野屏風」は、咲き乱れる秋草に大きな下弦の月だけを描き、伝宗達筆「武蔵野図屏風」(根津美術館蔵)も地平線を低く取って上半分を金の雲で蔽った下に、右に大きく朱で入日を、左に大きく銀で昇る月を、どちらも地平にかけて半円で描いた他は、紺青で水の流れと金地で堤、その手前に秋草のみを描いている。また、江戸東京博物館の「武蔵野図屏風」も、何も無い背景に若草色の多数の細い縦線で萌え出た草だけを描いており、琳派は他にもこのような構図の屏風をいくつか残していて、草原を主なモチーフとする点など、どれもほとんど同様である。なお乾山に「墨田川・武蔵野乱箱」(大和文華館蔵)があり、ここでも武蔵野は群生するススキで表されている。

更に浮世絵でも、歌麿に「武蔵野」と題する三枚の続き物(パリのギメ美術館蔵)があり、歌麿らしく手前に三人の美女を立たせているが、その背景は、草原に大きな月が出るという、中世和歌以来のモチーフである。

これらはそれなりに美しく、価値を有するが、風景(今の場合は武蔵野)を描く方法と

しては、全く概念的で様式化されており、こうした伝統的な観念から解放されて実景を直視するには、浅井忠のように近代西洋画の観察眼と手法が必要だったのである。その例をもう一つ挙げれば、東京美術学校（今の東京芸大美術学部）日本画科の昭和六年の卒業制作の一つに「武蔵野」と題する大型の絵がある。この絵とその作者（山田申吾、昭和五二没）のことはこれ以上知らないが、横長の画面の下（手前）半分には、ところどころに稲束を稲架（はざ、刈った稲をしばらく吊して干すための木組）に架けた刈田を、その向こうには左右に重なる低い丘を、そして遠景としては青く霞む山なみ（恐らく秩父・丹沢の山々）を描いている。琳派の屏風類とは全く異なり、基本的に写生によっていることは言うまでもない。

武蔵野を題材とした詩歌や絵画などから、日本の伝統的な文学や美術の特質とその時代的変遷の一端とを、以上のように考えた。

参考文献（文中に挙げたものは多く省く。また刊年の表示は各本の奥付による）

大岡昇平『武蔵野夫人』（創元文庫）創元社、昭和二七年

名著複刻全集編集委員会編『新撰名著複刻全集近代文学館 武蔵野』日本近代文学館、昭和五七年

野田宇太郎編『武蔵野市民版 武蔵野』武蔵野市、昭和四 年

加藤恵・坂口よし朗編『武蔵野歴史散策』（カラーブックス）保育社、昭和五七年

後藤茂樹編『現代日本美術全集 16 浅井忠・黒田清輝』愛蔵普及版集英社、一九七四年

芳賀 徹『絵画の領分 近代日本比較文化史研究』朝日新聞社、昭和五九年

伊藤敏子『伊勢物語絵』角川書店、昭和五九年

向井潤吉『日本の民家』保育社、昭和五四年

山川武・吉田千鶴子編『東京美術学校卒業制作 日本画』京都書院、昭和五八年

---

次の問題(1 - 42)には、それぞれ a , b , c , d の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

---

1. 冒頭に言及した校歌の歌詞は、普通の詩の形式で引用すれば、和文は空白、英文はコンマの箇所で改行して、それぞれ三行になる。そのように考えると、日本語の歌詞と英語の歌詞との対応について述べた次の短文の中で、最も正しいのはどれか。
  - a. 毎行よく対応している。
  - b. 一行目は一応対応しているが、二・三行目はほとんど対応していない。
  - c. 一・二行目はほぼ対応しているが、三行目は全く別のことを言っている。
  - d. 一行目と三行目とはかなり対応しているが、二行目には情報の出入りがある。
  
2. その日本語の歌詞の二行目の「ふじのね」の意味として、次の中で正しいのはどれか。
  - a. 「ね」は「根」で、富士山の麓。
  - b. 「ね」は「嶺」で、富士の山それ自体。
  - c. 「ね」は「音」で、富士山の方から響いてくる風の音。
  - d. 「ね」は強調・整調の助詞で、「富士が、ねえ」の意味。
  
3. 道路の案内標識で矢印の先に地名を記すときに一般に採られている方針は、次のどれと考えられるか。
  - a. 長い地名は適当に略して書く。
  - b. 三字を超える地名は初めの三字のみを書く。
  - c. 「市」「町」「村」などの行政単位名は省く。
  - d. 画数の多い漢字を含む地名は、初めの三字程度にとどめることがある。
  
4. 武蔵野市について、次の中で正しいものはどれか。
  - a. 「武蔵野」という地名を行政単位の名として用いたのは、明治末期からである。
  - b. その範囲は、古来普通に言われてきた「武蔵野」とはややずれている。
  - c. かつての吉祥寺村は、第二次大戦前は、武蔵野町の一部であった。
  - d. 間もなく市制五十周年を迎える。

5. 三鷹市について、次の中で正しいものはどれか。
- a. 三鷹市として独立する前は、東京市に属していた。
  - b. 大太平洋戦争末期には、まだ三鷹村であった。
  - c. 昭和二三年に太宰治が玉川上水に投身したときは、もう三鷹市になっていた。
  - d. 昭和二四年の三鷹事件のときは、まだ三鷹町であった。
- (注) 三鷹事件 = 昭和二四年七月のある晩、三鷹駅構内で無人電車が暴走して死傷者を出した事件。
6. 武蔵野について、次の中で『大日本地名辞書』の記述と合致しないものはどれか。
- a. その名称は国名に由来し、元来「武蔵国の野」の意であったかもしれない。
  - b. 利根川の分流（例えば江戸川）や東京湾よりも東の地帯は含まない。
  - c. 江戸時代までは、まだ耕地や人家が少なかった。
  - d. 現在も昔の藪や草原を思わせる箇所がある。
7. 『大日本地名辞書』は、武蔵野の範囲としていくつかの認定を挙げているが、次の中でそれらに入らないものはどれか。
- a. 関東平野の全域
  - b. 武蔵国の平野部
  - c. 府中と川越の間
  - d. 秩父地方の山里
8. 武蔵野の範囲として、次の中で西村健二の認定に最もよく重なるのはどれか。
- a. 武蔵国の平野部
  - b. 東京都の西半分
  - c. 関東平野の全域
  - d. 多摩川の流域
9. 武蔵野について記述した文献として資料に見えるものを著者の名で挙げたとき、その文献が刊行された順序として正しいものは、次のどれか。
- a. 吉田東伍、鳥居龍蔵、高橋源一郎、西村健二
  - b. 鳥居龍蔵、吉田東伍、西村健二、高橋源一郎
  - c. 高橋源一郎、西村健二、鳥居龍蔵、吉田東伍
  - d. 西村健二、高橋源一郎、吉田東伍、鳥居龍蔵

10. 次の中で、大岡昇平の作品でないものはどれか。
- 野火
  - 浮虜記
  - レイテ戦記
  - ビルマの豎琴
11. 大岡昇平の「武蔵野夫人」について、次の中で資料の記述から肯定できる、または蓋然性の最も高いものはどれか。
- 国木田独歩の「武蔵野」にヒントを得て書かれた。
  - 主人公たちは、多磨霊園や多摩湖のあたりも散策している。
  - 第二次大戦後の性の解放がテーマになっている。
  - 当時の風俗を描いた現代小説である。
12. 次の中で、山田美妙の「武蔵野」について、資料の記述から肯定できる、または蓋然性の最も高いものはどれか。
- 「太平記」の一節を基にした歴史小説である。
  - 国木田独歩の「武蔵野」に影響を与えている。
  - 作者の主張する言文一致の文体で書かれている。
  - 口絵の裸体画が、発表当時問題とされた。
13. 「太平記」について、次の中で正しくないものはどれか。
- 「平家物語」と同様、琵琶法師によって語り広められた。
  - 「平家物語」は仏教思想が強いのにに対して、儒教思想の面が強い。
  - 南北朝時代の戦乱を題材とした、軍記物語の傑作である。
  - その題名には、平和への期待が込められていると言われる。
14. 資料は、奥多摩・奥武蔵、高尾山あるいは湘南地方などの地域は武蔵野ではないと言っている。その理由はいくつかあり得るが、次の中でその理由にならないものはどれか。
- 関東平野の外だから。
  - 武蔵国の範囲ではないから。
  - 「武蔵野」の呼称に山はふさわしくないから。
  - 「～野」という地名は海岸地方を含まないから。

15. 浅井忠の「春畝」について、資料の記述または事実に合致するのは、次のどれか。
- a. この絵は、春先の農作業の一つである「麦踏み」を描いたものである。
  - b. この絵に描かれたような風景は、昭和二十年頃までは東京の西郊でよく見られた。
  - c. この絵は、彼のもう一つの代表作「収穫」とともに、当時の武蔵野の農作業を写生したものである。
  - d. この絵は、国木田独歩の「武蔵野」の内容を連想させるからか、それを解説した書籍のイラストにも使われている。
16. II の冒頭近くの記述に関して、資料から確かに言えることは、次の中のどれか。
- a. 浅井忠の名作「春畝」は写真によって描いたものであって、その意味で実写とはとても言えない。
  - b. 昭和二十年頃には、今の板橋・練馬・杉並・世田谷各区の地域は東京の西部と考えられていた。
  - c. 雑木林の点在する風景は古代以来変わっておらず、古典の世界がこのことを見失わせていた。
  - d. 『大歳時記』第三巻が指摘するような風景は、独歩が出るまでは誰も気づいていなかった。
17. 武蔵野の景観・状態について述べた次の記述の中で、資料に述べるところと最もよく一致するものはどれか。
- a. 広葉樹の林が切り開かれ、完全な草原になった時期がある。
  - b. 縄文・弥生時代以来、広葉樹の雑木林が主な要素であった。
  - c. 稲作が発達し、樹木が伐られて田畑が開かれて以来、草原のイメージが成立した。
  - d. もともと草原を主要な特徴としていたが、人が住むようになり、屋敷林や神社の森などが現れた。
18. 「万葉集」の「東歌」について述べた次の小文の中で、最も正しいものはどれか。
- a. トウカと訓み、東国方言で詠まれた歌。
  - b. アズマウタと訓み、主に関東地方で作られた歌。
  - c. アズマウタと訓み、主に東国（本州東部）で歌われた民謡的な歌。
  - d. アズマノウタと訓み、東国（同右）の民謡的な歌と東国に下向した歌人の歌。

19. 奈良時代には「武蔵」はムザシと発音されたと考えられているが、そのよう考える根拠として最も適切と見られるものは、次のどれか。
- 「かざす」(動詞、髪に挿すの意)や「かざし」(その名詞、髪に挿したものなどにも言う)のように、当時は語の第二音節(第二拍)のサはザと濁ったから。
  - 今日の本州東北方言に見るように、当時のこのあたりでは、しばしば清音の濁音化があったから。
  - 「武」「蔵」のそれぞれの当時の音はムとザウであったと認められるから。
  - 一字一音表記に用いられた漢字「射」は濁音のザを示す万葉仮名だから。
20. 資料に引用した「万葉集」の歌について述べた次の説明の中で、正しいものはどれか。
- 三三七四の歌は、まだ自分が愛を打ち明けていない相手の名が占いに出了たことを詠んだものである。
  - 三三七五の歌の初二句は、その次を言い出すために修辭的に置かれた序である。
  - 三三七六の歌の初二句で言っているのは、「私を恋しく思うなら袖を振って合図して下さい」ということである。
  - 「或本の歌」を除き番号を付した五首は、すべて女が男に向かって言いかけたものと見られる。
21. 「万葉集」三三七四の歌について、資料が「その歌でも「武蔵、野」といっていること」に注目しているが、それを分かりやすく補説したのは、次の中のどれか。
- 武蔵野の開墾がある程度進んでいて、森林の中に「野」と呼び得る箇所もあった。
  - 当時の武蔵野には、その骨がこのようなト占に使われる鹿や猪が野生していた。
  - このようなト占は各地で行われていたが、それが武蔵国でも行われていた。
  - このようなト占は、当時武蔵野に特有の風習であった。
22. 「伊勢物語」の「武蔵野は」の歌の第二句「今日はなやきそ」の説明と意味として正しいものは、次の中のどれか。
- 「そ」は清音で、今日は「野焼き」をしないでくれ、の意。
  - 「そ」は「ぞ」に同じで、今日は「花焼き」という行事をする日だよ、の意。
  - 「な」「そ」はそれぞれ「野」「ぞ」の東国方言で、「今日は野焼きだよ」の意。
  - 「そ」は清濁どちらでもよく、「な」は間投助詞で、「今日はね、野焼きだよ」の意。

23. III の終わりに近く、「場所は必ずしも武蔵野に限る必要はなく」とあるが、これを補足説明したものと最も適切なものは、次のどれか。
- a. 野焼きは、武蔵野だけでなく春日野でも行われていた。
  - b. 野焼きの歌は、武蔵野だけでなく宮城野や筑紫野などでも詠まれ得た。
  - c. 野焼きを詠むとすれば、武蔵野ばかりでなく、春日野も当然舞台になる。
  - d. 野焼きの歌は、武蔵野や春日野に限らず、全国各地で民謡的に歌われ得た。
24. III の末尾に、その部分の論旨を補強するために一文を加えるとすれば、次のどれが最も適切か。
- a. 当時の日本では、焼畑農業が行われていたのである。
  - b. 野焼きは、春先すなわち早春に行うものだったのである。
  - c. 律令時代の武蔵野は、まだ焼畑農業に依存していたのである。
  - d. 平安貴族は、武蔵野よりも春日野を身近に感じていたのである。
25. 古今集八六七番の歌の意味を分かりやすい現代語に直した場合、正しいのは次のどれか。
- a. ムラサキという草がある故に、武蔵野の野草を食べながら景色を見ることだ。
  - b. ムラサキが一本生えている故に、武蔵野のムラサキはどれも可憐に見えることだ。
  - c. ムラサキという草一種類がある故に、武蔵野の草のどれにも心が引かれることだ。
  - d. ムラサキの一本を絵にして、武蔵野の草を食べながらしみじみとした気持ちになることだ。
26. IV の最初の引用歌群の次に、「平安初期にも武蔵野は万葉時代と同様なものとして詠まれている」とあるが、「万葉時代と同様なもの」とは、具体的にはどういうことか。その説明として、次の中から正しいものを選び。
- a. 秋には草葉も色が変わる。
  - b. 草の生い茂る野原であった。
  - c. 恋愛感情を詠み込む場に用いた。
  - d. 動物の骨を焼いて占うことが行われていた。



27. 資料は「新古今集」の歌における武蔵野のイメージについて、「当時の伝統を出るものではない」と言うが、その「当時の伝統」とは、どのようなイメージか。次の中から正しいものを選び。
- a. 秋風の吹きわたる草原である。
  - b. 紫草を連想する草原である。
  - c. 秋草の美しい草原である。
  - d. 広大な草原である。
28. 「東京市歌」の冒頭部について述べた次の文の中で、妥当なものはどれか。
- a. 「紫匂ひし」とあるが、ムラサキは特に芳香を有する草ではないから、この言い方は適当でない。
  - b. 「匂ひし」の「し」は本来実体験を回想するときに用いるから、ここは「けり」を使って「匂ひける」と言うか、むしろ「～ていた」の意味で「匂ひたる」または「匂へる」とした方がよい。
  - c. 「日本の文化の花咲き乱れ」は、近世の江戸が世界最大の都市に発展したことを言っている。
  - d. 「日本の文化の花咲き乱れ」には、昭和初期の日本文化が和風と洋風など価値観に混乱をきたしていたことへの反省が込められている。
29. 「東京行進曲」の歌詞で、「あの武蔵野の」と「武蔵野」に「あの」を冠しているのは、どのような意味か。次の中から最も適切なものを選び。なお、資料に引用しなかった部分の歌詞は、解答には必要がない。
- a. 新宿がまだ昔の面影を残す田園であった頃の武蔵野の。
  - b. 月を眺める名所の一つとされてきた武蔵野の。
  - c. 月の沈んでゆけるような峰もないと歌われた武蔵野の。
  - d. 月は草原から出て草原に入ると歌われた武蔵野の。
30. 平安～鎌倉時代の文学の中で、武蔵野の描写もしくは言及があることが資料から推測できないものは、次のどれか。
- a. 伊勢物語
  - b. 源氏物語
  - c. 西行物語
  - d. 平家物語

31. 「更級日記」に関して、資料から肯定できるのは、次のどれか。
- 引用の冒頭部分は、「このあたりは、かつて下総国だったが、今は武蔵国に編入されている」という意味である。
  - 作者はこれまでに、「源氏物語」の「紫のゆかり」について聞いていた。
  - 作者には紫草は見えず、他の草が茂っていた。
  - 作者は、馬で武蔵野を旅していた。
32. 「とはずがたり」の引用部分に関して、次の中で肯定あるいはそのように断定できないものは、どれか。
- 作者は、「武蔵国には山はない」と言っている。
  - 作者は、武蔵野で少なくとも一度年を越している。
  - 作者は、武蔵野の秋色を賞(め)でたいと思った。
  - 作者が武蔵野を旅したのは、八月一日からの三日間であった。
33. 次に挙げる鎌倉・南北朝時代の和歌の中で、平安時代以来の伝統を最も強く守って詠んでいるものは、どれか。
- 武蔵野は異山見えぬあまぐもに富士の嶺ばかり残る白雪
  - 武蔵野や入るべき嶺の遠ければ 空に久しき秋の夜の月
  - 東路は故郷ながら 武蔵野の遠きに末をなほや迷はん
  - 武蔵野もさすが果てある日数にや 富士の嶺ならぬ山も見ゆらん
34. 次の四首の歌は、いずれも江戸時代の著名な歌人の詠であるが、武蔵野のイメージが平安時代以来の伝統に最も遠いものは、どれか。
- さぞな見む山の端しらぬ武蔵野に 秋は最中の有明の月(烏丸光広)
  - やまびこも山だにあらば 武蔵野や 子を思ふ鶴の音には答へん(木下長嘯子)
  - うかれても果てはある夜の月影に 分けもつくさぬ武蔵野の原(本居宣長)
  - 武蔵野はしもと萱原しげければ さやにも見えぬ多摩の横山(村田春海)
- (注) しもと=枝の茂った若い木立。また、若く細い枝。

35. 資料とそこに引用した国木田独歩の「武蔵野」とによる限り、次の中で正しいものはどれか。
- a. 独歩のこの作品は、日本近代文学で武蔵野を表題や題材としたものの最初である。
  - b. 「武蔵野の俤」は、明治三十年代には多摩・入間郡においても完全に消滅していた。
  - c. 独歩の「武蔵野」の冒頭は、「武蔵野の俤は今纔（わずか）に入間郡に残れり」...」である。
  - d. ツルゲーネフの描写したロシアの落葉樹の林と独歩が描いた武蔵野の雑木林とは、同じような木から成っている。
36. 独歩の「武蔵野」について述べた次の小文の中で、資料に照らして正しいものはどれか。
- a. 浅井忠の名画「春畝」に触発されて書いた。
  - b. 武蔵野の雑木林の美が、そこに初めて説かれた。
  - c. 以後、武蔵野の雑木林が注目され、保護されるようになった。
  - d. 作中に、ツルゲーネフの短編の一部分を訳して挿入している。
37. 資料に引用した部分に関する限り、独歩が「武蔵野」で述べているところは事実の通りであるとすれば、それを書いたときの彼について述べたものとして正しいのは、次のどれか。
- a. 古来の武蔵野の姿は入間郡に少しだけ残っていると、ある文章で読んだことがある。
  - b. 古来の武蔵野の姿は入間郡に残っているだけだと、当時の地図の説明で読んだことがある。
  - c. 古来の武蔵野の姿はかろうじて入間郡に残っていると、江戸初期の地図で見たことがある。
  - d. 古来の武蔵野の姿は入間郡に残っているだけだという、江戸後期の文章を読んだことがある。
38. 資料に引用した部分に関する限り、独歩の「武蔵野」の記述はすべて事実の通りであるとすれば、次の中で正しくないものは、どれか。
- a. 彼は少年時代を西日本で過ごした。
  - b. 彼は上京するまで西洋で成長した。
  - c. 上京したのは進学のためである。
  - d. 上京直後は、まだ雑木林の美を知らなかった。

39. 武蔵野を描いて、丈の高い草の中に一組の男女が身を潜めている構図の絵が基にしている和歌は、次のどれか。
- a. 武蔵野の草はもろ向きかもかくも君がまにまに我は寄りにしを
  - b. 武蔵野は今日はなやきそ若草のつまもこもれりわれもこもれり
  - c. 紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る
  - d. 武蔵野は袖ひつばかり分けしかど若紫はたづねわびにき
40. 琳派が武蔵野を描写または暗示する場合に用いたもので最も重要なものは、次のどれか。
- a. 月
  - b. 草原
  - c. 地平線
  - d. 隅田川
41. 次の中で、浮世絵の説明として正しくないものはどれか。
- a. 題材は、美人画や役者絵のような人物に限られる。
  - b. 肉筆画もあるが、木版の版画として刷られたものが多い。
  - c. 明治以後も、文明開化の世相を描いたものなどがある。
  - d. 早くから欧米で注目され、海外に流出した名品が少ない。
42. 次の中で、資料の意見を最も適切に要約したものはどれか。
- a. 文学でも美術でも、題材に古典的なイメージが確立すると、それを打破するのは容易ではない。
  - b. 古代・中世の和歌や近世の絵画には、今日から見て写実・写生と言えないものが多いが、それはそれなりに芸術としての価値を有する。
  - c. 日本の近代の文学や美術が、伝統的な手法から脱して近代的な写生の方法を取り入れるためには、西洋の文学や美術に学ぶ必要があった。
  - d. 日本の文学と美術とは互いに影響しながら発達しており、それぞれが西洋の刺激によって近代化を遂げた際にも、それが見られる。